日本宗教学会第 85 回学術大会で発表

堀内　みどり

標記大会が 9 月 11 日～ 13 日、東北大学を会場に開催された。11 日には開会式の後、公開シンポジウム「狩猟文化と宗教儀礼」が開催された。高橋原東北大学教授の趣旨説明を受けて、西村直子、竹之内裕文、馬場祐美の各氏が登壇して発題。田中雅一氏がコメントし、その後会場を交えた質疑応答があった。

本学関係者の発表は以下の通り（パネル・発表順）。

島田勝巳：「宗教」の胎動―クザーヌスの『信仰の平和』を中心に―

深谷耕治：和辻哲郎における宗教体験と歴史性―『倫理学』の再検討―

澤井義次：井筒俊彦と宗教現象学（パネル「井筒哲学の比較宗教学的探求」）

岡田正彦：近世における梵哲学の隆盛と近代仏教（パネル「日本における暦と近世・近代宗教史」）

山本佳代子：到達点を想定しないスピリチュアルケアは可能か（パネル「更新される定義から考えるスピリチュアルケア」）

澤井治郎：天理教の分教会所設置のいきさつ

堀内みどり：「聴きだすけ」と「話一条」―天理教の布教についての一考察―

また天理教関連の発表は以下の通り。

村山元理：『茨木基敬公三代様一代記之骨子　上巻』の公開について

青木繁：公共領域における「潜在的宗教性」―天理教里親養育を例に―

第 390 回研究報告会（2026 年 9 月 29 日）

「『文明化』とプロテスタンティズムの不可欠性―南北戦争以前の米国宣教師によるブラジル像の構築―」

中西　光一

本報告では、南北戦争以前の 1830 年代から 1850 年代にかけてブラジルで活動した米国人宣教師、ダニエル・パリッシュ・キダーとジェームズ・クーリー・フレッチャーの共著『Brazil and the Brazilians』（1857）を取り上げ、両者が思い描いた「文明化」の内実を、奴隷制、移民、カトリック教会の 3 点から検討した。先行研究は、米国系プロテスタント宣教師の活動が、カトリックに象徴される「後進性」を克服し、自由主義・民主主義・近代教育といった米国的価値観を普及させる「文明化」の言説であると論じてきた。しかし、奴隷制や自由労働、白人移民と「文明化」との関係については、十分に明らかにされていない。

そこで同書の記述を分析し、次の 3 段階から成る構想を明らかにした。第 1 に奴隷貿易の廃止を起点とする奴隷制の終焉（制度的文明化）、第 2 に白人移民の受け入れと自由労働の導入、および米国との通商関係の構築（経済的文明化）、第 3 にカトリック教会に代わる米国系プロテスタント教会による「純粋な福音」の浸透（宗教的文明化）である。両者にとって「文明化」とは、制度・経済・宗教の各側面からブラジル社会を変革し、米国的価値観に基づく「文明世界」へと導く過程であった。

最後に、こうした米国人宣教師の認識をより広い文脈から捉えるため、ドイツ系など他系統のプロテスタント宣教師との比較を通じて、その言説の固有性を検討する必要性を指摘した。また、ブラジルの奴隷制を米国より穏健なものとして描く同書の特徴について、南北戦争前夜の米国社会や宣教師自身の出身地域との関係から検証する必要性を指摘し、本報告を締めくくった。

2027 年度公開教学講座のご案内

―信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（11）―

2027 年度の公開教学講座は、以下の日程で開催致します。

第 1 回 6 月 25 日　井上昭洋所長
182 話「元の屋敷」

第 2 回 7 月 25 日　金子昭研究員
133 話「先を永く」

第 3 回 9 月 25 日　澤井治郎研究員
117 話「父母に連れられて」

第 4 回 10 月 25 日　尾上貴行研究員
190 話「この道は」

第 5 回 11 月 25 日　島田勝巳研究員
120 話「千に一つも」

第 6 回 1 月 25 日　堀内みどり主任
178 話「身上がもとや」

日時：毎月25日　13:00～14:30

会場：天理大学研究棟 3 階
第 1 会議室

事前予約不要・来聴無料